

第2回(2008.11.13 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「11月は七五三」

毎年11月15日は、全国の神社仏閣で「七五三」のお参りをする家族を見かけるが、「七五三」とは子供の年齢をあらわしている。先ごろ、ある若い女性が「生後753日目に神社にお参りすること」といったのにはびっくり仰天した。日本の教育はどうなっているのだ、と憤慨したものだが、そういった珍なる者の話は別の機会に譲るとして、「七五三」の故事来歴を知らずに、ただ単に3歳、5歳、7歳になれば、お参りをする習慣なのだと思っている人も多い。この行事は、古く平安時代から子供が一人前になる大切な儀式なのである。平安時代、それまでは男女ともオカッパ頭だったが、3歳になると「髪置の儀」といって、髪を伸ばし始める儀式をした。そもそも髪置の儀は、碁盤の上に子供を乗せて、髪を少し切ったり梳いたりして、白い綿帽子のようなものを被せたりするようだが、白い帽子は白髪になるまでの成長を願う意味からだと思われる。女の子はそれ以後髪を切らなかつたが、亭主がなくなると「髪を下ろす」といって、長い髪を切る習慣があった。ちなみに、生後7日目の赤ん坊は一旦髪を剃った。乳児のときに産毛を剃ってやれば、その後に生えてくる髪が濃くなると信じられていたためである。毛髪の先端を切り取るわけだから、断面の面積が増えて色が濃く見える。そこから、髪が増えたように見えるのだが、現在でもそういった言い伝えはあり、理髪店などでは切った乳幼児の髪で筆を作ってくれるところもある。もちろん理髪店主が作るのではなく理髪店から専門業者に依頼するのだが、この筆は実用的なものではなく、あくまでも誕生記念のためのものである。

女の子が7歳になると「帯解の儀」が行われた。若い娘の帯を解いてナニをする！？などと妙なことを考える不届き者がいるが、これは女の子が初めて帯を結ぶ儀式である。初めて帯を結ぶのに「帯解」とはいかがが、というるさい人もいるだろうが、そういった人は無視することにして、昔は男女とも着物に紐のような帯を結びつけておいて、それで着物を縛っていた。この紐を解いて、今でいう「帯」を締めるのだが、一般的な儀式になったのは室町時代だといわれている。また、5歳になると「袴着の儀」といって男の子が初めて袴を付ける儀式をした。この儀式も平安時代からあったが、江戸時代の末期まで年齢、式日ともに決まっていなかった。

この「帯解の儀」と「袴着の儀」は、本来はそれぞれ9歳で行われていたようだが、江戸時代に男の子は5歳、女の子は7歳になったら、その年の11月15日に行うようになった。当然ながら昔は旧暦であり、年齢は数え年である。

現在では、7歳と5歳に3歳の「髪置の儀」を加えて「七五三」と呼んで、11月15日に神社仏閣にお参りするのが、これは、旧暦では11月15日は満月の吉日だったから、収穫祭にちなんで子供の成長を願ったのである。旧暦の11月に行われた行事が、現在の暦の11月に行うようになって、年齢も満年齢で行う人も多くなった。こうして、七五三の故事来歴やしきたりなどがあいまいになり、いい加減になっていったのであろう。今までは単なる親の見栄ではないかと思えるほど、親がやたらとチャラチャラ着飾って、これみよがしにお参りする人が多いが、勘違いも甚だしい。中には豪華な着物に真っ白に厚化粧した母親が、寒くて鼻水を垂らしているふだん着姿の子供が嫌がるのを、無理やり手を引っ張ってお参りする光景も見られるが、「お稲荷さんのお使いである狐に子供が誘拐されているのではないかと思ったりする」と、とんでもなく失礼なことをいった人がいる。

このように、「七五三」は子供が成長とともに、だんだんと大人の仲間入りを自覚させる儀式でもあったが、いわゆる現在の成人式に当たる男の子の「元服」の儀式も古くからあり、記録によれば710年ごろ元明天皇(げんめいてんのう、女帝、第43代天皇、在位707~716)が孫の首皇子(おびとのおうじ、後の聖武天皇)を皇太子として元服させたという記録がある。元服とは「加冠の儀」といって冠を頭に戴くのだが、年齢は一定していなかった。平安末期の武将で「源氏の棟梁」とか「武士の棟梁」と称えられた八幡太郎源義家(はちまんなろう みなもとのよしいえ)は7歳だったというが、江戸時代の徳川家でもおおむね10歳以下だったようである。

現代では20歳で成人とし、1月の第2月曜日を「成人の日」といって祝日にしているが、毎年必ずどこかで、精神的に大人になれない新成人が大騒ぎして式典をぶちこわしたりしている。昔の子供の方が、心身共に早く大人になっていたのである。もっとも、「成人の日」は本来「小正月」である1月15日だったが、政府は連休を増やすために無理やり15日に近い第2月曜日にこの祝日を持ってきたので、まあいい加減なものだ、と思ってしまう若者も多いのだろう。それに、周囲の大人たちが子供たちにしっかりした心の準備をさせないまま育ててきたから、当の本人に自覚がないのに、それぞれの思惑や利害で取り仕切っているのが見え見えの式典では、無理があるのかもしれない。

また、刑法を改正して「成人の年齢をもっと下げろ」といった意見の人も多いが、「戦後教育が間違っている」と立腹する老人も多い。ところがそうしている老人たちが、1945年8月14日の日本の敗戦で、教育方針を180度転換させ、その際に戦前の良いところも消し去ってしまった結果でもあり、また自分たちが舐めてきた苦勞をさせたくないという過保護の家庭教育(現在では家庭教育という言葉が死語になってしまったか)もしくは親の義務の放棄のせいなのである。つまり、天に向かって唾を吐いた結果なのだという評論家も多い。

そう言っている評論家も、同時代に生きてきたから同罪なのだが、評論家は決してそうはいわない。それが評論家の評論家たる所以である。